

オオキンケイギク生育地での 植生管理実験について

畠瀬 頼子
(国土交通省 国土技術政策総合研究所)



木曽川中流域(木曽三川公園)

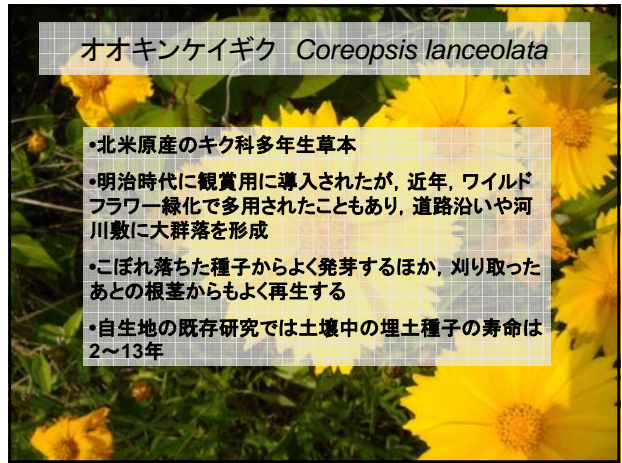


礫河原に生育するオオキンケイギク



オオキンケイギク *Coreopsis lanceolata*

- 北米原産のキク科多年生草本
- 明治時代に観賞用に導入されたが、近年、ワイルドフラワー緑化で多用されたこともあり、道路沿いや河川敷に大群落を形成
- こぼれ落ちた種子からよく発芽するほか、刈り取ったあとの根茎からもよく再生する
- 自生地の既存研究では土壌中の埋土種子の寿命は2~13年



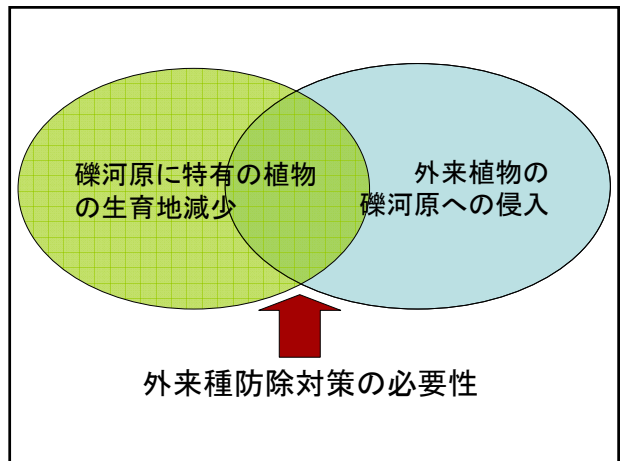
礫河原に特有の植物

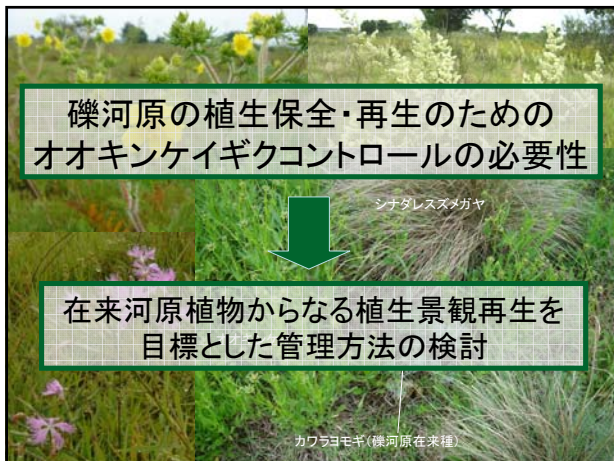


礫河原に特有の植物
の生育地減少

外来植物の
礫河原への侵入

外来種防除対策の必要性



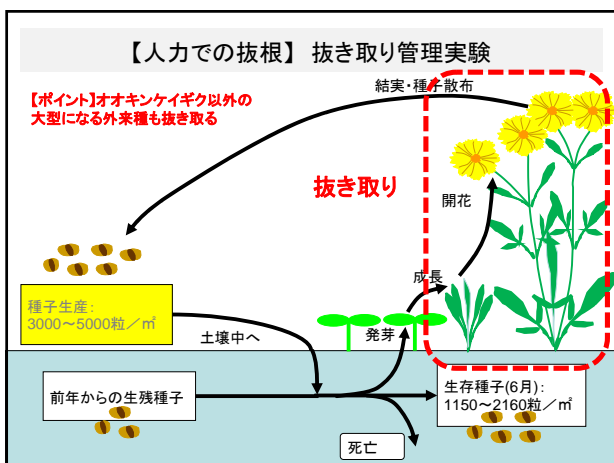
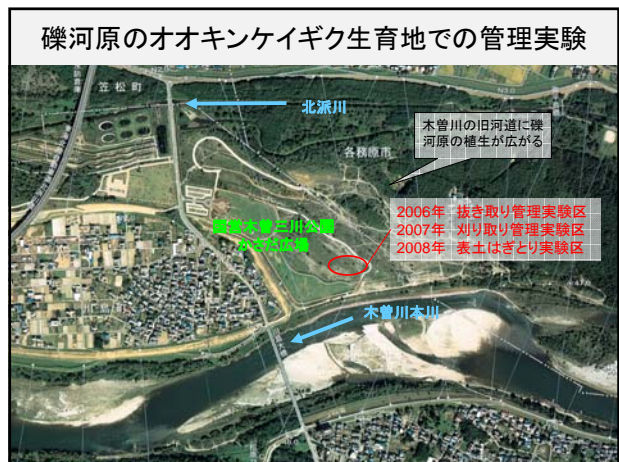


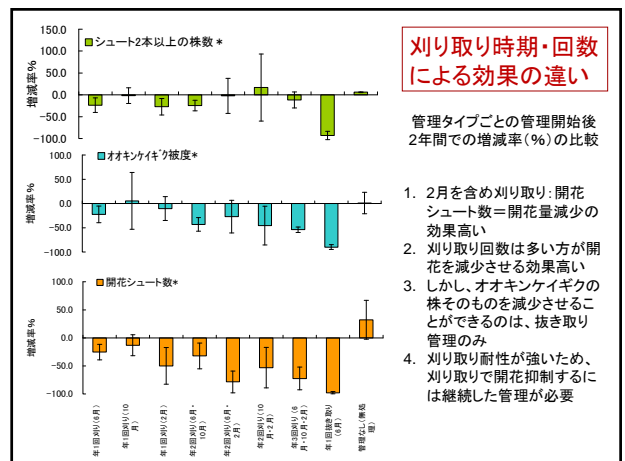
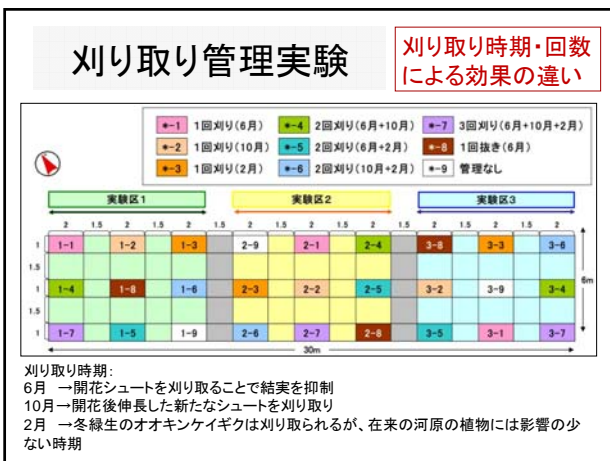
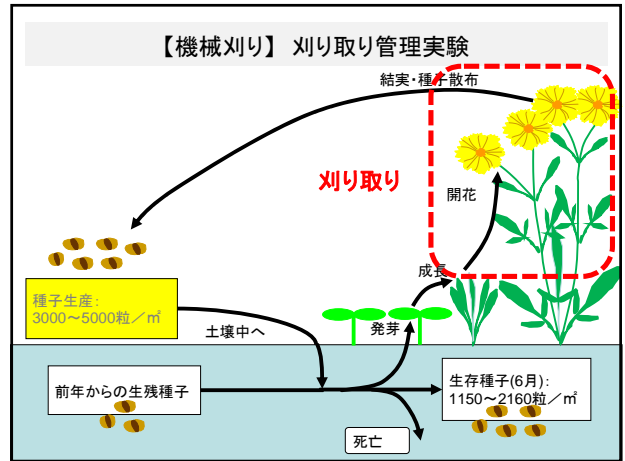
外来種防除における目標

対象	目標設定	メリット	デメリット
外来種について	根絶	•将来的には防除しなくてもよくなる	•広域に侵入しており個体数が多い場合は、労力と時間が多大となる
	影響低減	•既に侵入が進んでいる場合も実施可能	•継続が必要
	拡散防止	•既に侵入が進んでいる場合も実施可能	•継続が必要
植生の将来像	かつての自然植生を再生(礫河原の自然植生に戻すなど)	•希少な在来種などを保全できる	•周囲に外来種の供給源がのこる場合、継続的管理が必要
	外来種の生育しにくい(在来種に)遷移(背の高い草原や樹林など)	•将来的には防除しなくても外来種が減る	•希少な在来種などの生育に適さない植生になることもある
	人工的植生に変更(花壇や人工芝地に変更して管理)	•管理しやすい状態にできる	•在来種も消滅する

外来種防除の手法

	メリット	デメリット	実験
人力での抜根(抜き取り)	•外来種だけを除去できる •在来種を残すことで、在来種中心の植生に誘導できる •根茎から抜き取れる	•労力がかかる	○
機械刈り	•人力での抜根に比べ労力が小さい •既に広く実施されている	•在来種だけ刈り取らないことは困難、在来種にも影響 •刈り取り耐性の強い種は減少しない	○
化学物質による(除草剤、抑草剤など)	•労力をもっとも小さい	•混生する在来種への影響低減は困難 •薬剤の拡散による生物への影響	×
生物による(天敵の導入など)	•天敵が定着すれば労力少なく外来種を減少させられる	•新たな外来種になる、目的とする植物以外への影響拡大の可能性	×
環境改変による(外来種の生育しにくい立地づくり)	•外来種の侵入しにくい環境を長く維持できる可能性	•対象とする外来種以外も除去される	○

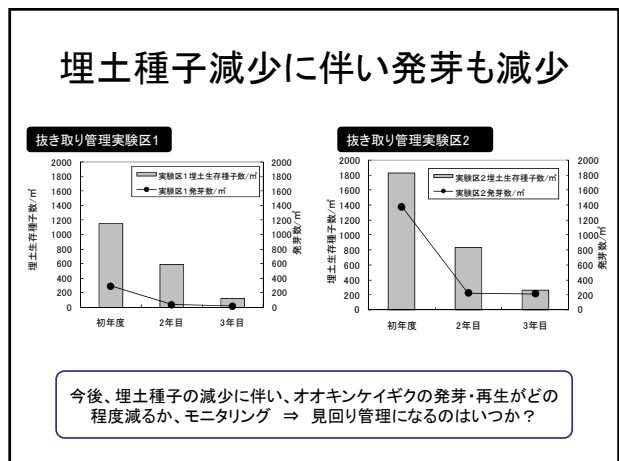
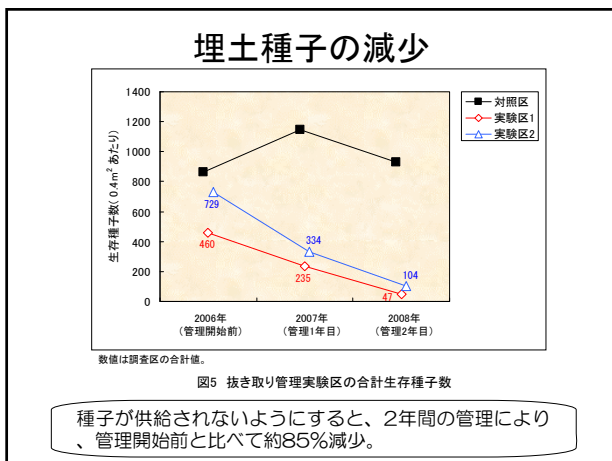
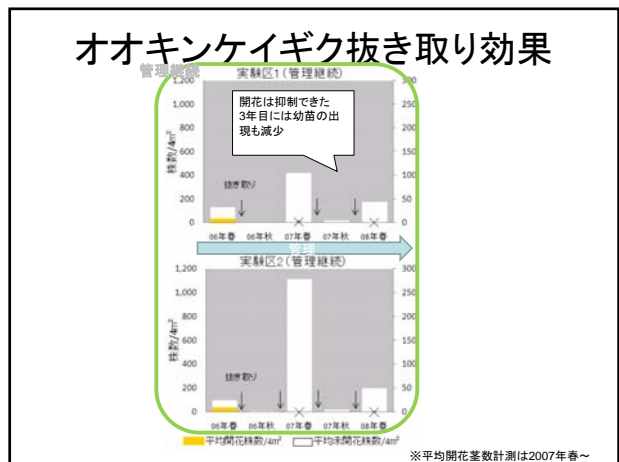
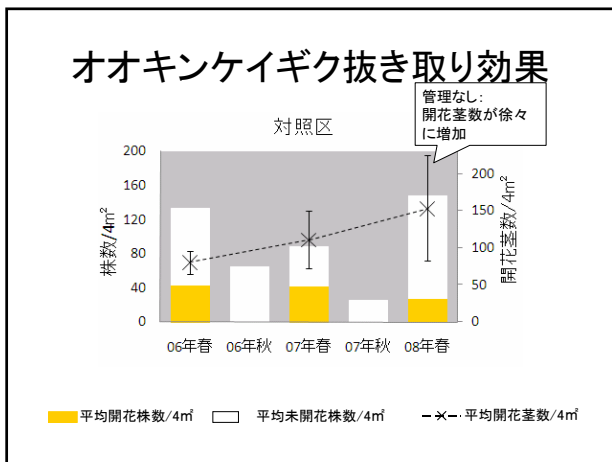




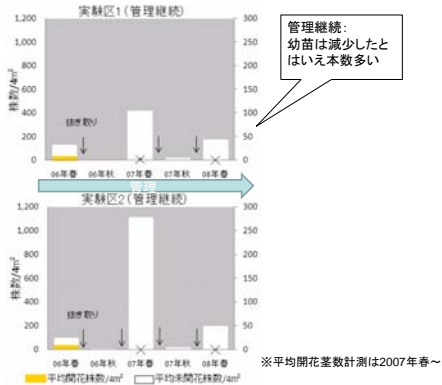


抜き取り・刈り取りのオオキンケイギク防除効果

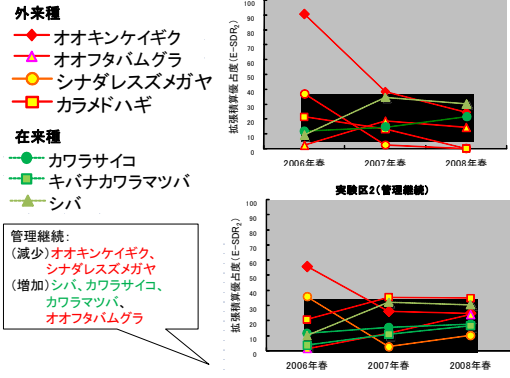
	株数を減らす＝影響減らす	花を減らす＝拡散させない
人力での抜根（抜き取り）	・効果高い	・効果高い
機械刈り	・効果低い	・2月を含んだ時期の刈り取りで効果 ・刈り取り回数は多い方が効果高い



根茎抜き残しを減らす工夫が必要



抜き取りによる優占度の変化



管理による攪乱と外来種の侵入には 注意が必要

- 抜き取り管理の継続は在来植物の被度を増加させる
- 一・二年生草本の外来植物の種数増加も見られる。



→外来種の増加しにくい環境づくりが課題

【環境改変による防除】表土はぎ取り実験



はぎとり作業中:2008年11月

表土はぎ取り実験



- オオキンケイギク埋土種子を表土ごとにはぎ取る効果の検証
- 礫河原の植生再生が可能か

はぎとり施工完了:2008年11月